日本に於ける『孔子家語』の受容

――徳川時代を中心として――

南澤良彦

序

『孔子家語』は中國に於いては夙に王肅僞作説が唱えられ、清朝中期（一八世紀後半）以降は、「其出於（王）肅手無疑。特其流傳既久、且遺文軼事、往往多見於其中、故自唐以來、知其僞而不能廢也。（其の肅の手に出づること疑ひ無し。特だ其の流傳既に久しく、且つ遺文軼事、往往にして其の中に見ゆること多きが故に唐自り以來、其の僞なるを知るも廢すること能はざるなり。）」[1]という四庫全書館臣の評價が公式見解となり、王肅僞作の證據を血眼になって捜すネガティヴな研究が喝采を博した。

これに對し、日本に於いては王肅僞作説は傳來したものの主流にならず、清朝と同時期の德川時代に『孔子家語』は『論語』の對偶乃至は補完としてよく讀まれ、岡百駒『補註孔子家語』及び太宰純『增注孔子家語』兩全注本をはじめとする優れたポジティヴな研究の成果が輩出した。明治以降も、狩野直喜氏や服部宇之吉氏等が清朝考證學の王肅僞作説をそのまま信奉する一方で、武内義雄氏や藤原正氏等は、王肅の僞作を認めながらもそれが全面的創作ではなく、「古家語」（原『孔子家語』）の再編集的行爲であったとして、現行『孔子家語』（王肅本）研究の意義を評價する[2]。

出土資料研究の成果[3]により、疑古派の呪縛から解放され、「古家語」と現行『孔子家語』との近親關係が解明されつつある今日から見て、武内氏らの炯眼には敬服する他ないが、德川時代に爲された厖大な『孔子家語』研究の蓄積も亦稱賛されるべきであろう。德川時代の日本漢學界の重厚な學問とそれに裏打ちされた思想とが相俟って『孔子家語』を『論語』に匹敵する文獻であると確信せしめたのだからだ。しかしながら、實のところ德川時代に於ける『孔子家語』研究については、原書解題や書誌學的研究は右に名を擧げた先人の著述を含め幾つかあるが、思想史的に掘り下げた研究は管見の限り皆無に近い[4]。

そこで、本論考は、德川時代に於ける『孔子家語』研究に窺える思想の解明を先に見据えつつその前段階として、前近代日本に於ける『孔子家語』受容の特質を、德川時代を中心として概觀しようとするものである。具體的には、先ず德川時代の『孔子家語』受容の一般的な特徴を解明し、次いで德川時代に登場した諸注釋書の中からそれぞ

れ徳川時代漢學に特徴的な側面を典型的に表現する岡百駒・太宰純・冢田虎三名の著作を取り上げその特質を詳細に檢討する。

一　徳川時代に於ける『孔子家語』の受容

徳川時代の『孔子家語』受容について論じる前に、その前史を瞥見しておこう。

『孔子家語』の日本傳來の正確な年代は不明であるが、藤原佐世（八四七～八九八）『日本國見在書目錄』（經部）「論語家」に「『孔子家語』廿一卷。王肅撰。『家語抄』一卷。」[5]と著錄される。『日本國見在書目錄』が成立したのは、八九一年頃であり、ちょうど『隋書』經籍志（六五六年成立）と『舊唐書』經籍志（九四五年成立）との間の年代である。また、唐初成立の『群書治要』には王肅本が節略收錄されるが、この書物も『日本國見在書目錄』（子部）「雜家」に「『群書治要』五十（卷）。魏徵撰。」[6]と著錄される。『群書治要』は奈良時代（八世紀）には傳來しており、平安時代初期（九世紀）には天皇が讀まれた記錄があり、[7]『孔子家語』も御讀に與った可能性は高い。

先人の指摘によれば、鎌倉時代には、嘉元四年（一三〇六）書寫の釋眞辯『性靈集略注』十卷（慶應義塾圖書館藏）に『孔子家語』が引用され、[8]また鎌倉鈔本『孝經正宗分聞書』（金澤文庫藏）に「門徒三千者、孔子ノ弟子也。……孔子ノ家語ト云文ニハ七十二人ト見タリ。此文ハ孔子門弟等之作也。」と記述されると言う。[9]室町時代には、永正一二年（一五一五）に上杉憲房（一四六七～一五二五）が足利學校に寫本『新刊標題句解孔子家語』六卷（全二册）を寄進している。[10]

慶長四年（一五九九）、徳川家康（一五四二～一六一六、征夷大將軍在職一六〇三～一六〇五）は足利學校第九代庠主の三要元佶（一五四八～一六一二）に命じて、『標題句解孔子家語』を出版させた。所謂古活字本・伏見本である。[11]卷末の跋文に次のように言う。

世際季運、而學校敎將廢也。維時內府家康公、于文于武、得其名。故興廢繼絶、爲後學刻梓文字數十萬而賜。予退爲謝公之恩惠、初開『家語』。此書是聖人奧義、治世要文、寔非小補也。刊字列盤中、則明本『家語』、以數本考正焉。或板行有訛謬、或文字由顚倒、以亡加之、以餘刪之。雖如此、有帝乎・鶴鶴誤者必矣。只願待博雅君子、改制焉也。謹跋。

慶長第四、龍集巳亥、仲夏吉辰。

前學校三要野衲、於城南伏見里書焉。[12]

（世季運に際して學校の敎將に廢れんとするなり。維の時內府家康公、文に于て武に于て、其の名を得たり。故に廢せるを興して絶ゆるを繼がんとし、後學の爲に文字數十萬を刻梓して賜へり。予退きて公の恩惠に謝せんが爲に、初めて『家語』を開く。此の書は是れ聖人の奧義にして、治世の要文なれば、寔に小補に非ざるなり。字を刊して盤中に列するに、明本『家語』に則り、數本を以て考正す。或は板行に訛謬有り、或は文字顚倒せし由り、亡を以て之を加へ、餘を以て之を刪る。此くの如しと雖も、帝乎・鶴鶴の誤有る者必なり。只だ願はくは博雅の君子を待ち、改制せんことを。謹んで跋す。／慶長第四、龍集巳亥、仲夏吉辰。／前學校三要野衲、城南伏見の里に於て書す。）

三要は家康から木活字數十萬個を下賜され、京都伏見に足利學校分校として建立された圓光寺に移り住み、その地で活字本の出版を行った。その最初の開版が『孔子家語』だったのである。[13]所謂伏見本は、慶長四年に三要元佶によって『孔子家語』・『六韜』・『三略』が、翌五年（一六〇〇）に西笑承兌（一五四八～一六〇七）によって『貞觀政要』

が、降って同一一年（一六〇六）に元佶によって『七書』がそれぞれ刊行された。いずれも徳川家康の命によるものであるが、家康の出版意圖は、「初開『家語』。此書是聖人奥義、治世要文、寔非小補也。」（『孔子家語』三要跋）、「去歳開『家語』於板、今歳刻『政要』於梓、遵聖賢前軌、而作國家治要宜也。（去歳『家語』を板に開き、今歳『政要』を梓に刻せるは、聖賢の前軌に遵ひて國家の治要を作すに宜しければなり。）」（『貞觀政要』西笑承兌跋）[14]、「大將軍家康公、以文安人、以武威眾、天下萬民咸歸服。……記『七書』於梓、以講直正之畢矣。（大將軍家康公、文を以て人を安んじ、武を以て眾を威せば、天下萬民咸な歸服せり。……『七書』を梓に記せるは、以て直正の畢を講ずるなり。）」（『七書』三要跋）[15]というものであった。すなわち、太平の世を建立し維持するために必要な聖賢の要訣が滿載された文武の書籍を開版するということである。中でも『孔子家語』は「聖人奥義」を傳える第一の書物と看做されたのである。

徳川家康が公刊した『孔子家語』は元の王廣謀『標題句解孔子家語』であった。『孔子家語』は魏の王肅による再發見以來、王肅注を伴ったテキスト（王肅本）が主流であったが、本書は王廣謀が本文を大幅にダイジェストした上で王肅注に代えて自己の注釋を附し、上欄に標題（小見出し）等を加えて成立した書物である。「句解」とは、大まかに理解させることであり、本書は謂わば通俗版『孔子家語』であるが、登場以來好評を博し、元代中期から明代前半にかけて大いに盛行した。日本に於いても鎌倉・室町時代に傳來していた本書は、家康の命により出版され、その威光のもと徳川幕府開府（一六〇三）前後の期間に全國各地に流布した。

しかしながら、當時の日本には「日本博士家所傳王（肅）注全本」[16]が現存し、家康沒（一六一六）後の元和年間（一六一五～一六二四）に、節略本である句解本に對抗する形で、活字を用いてこの王肅本が刊行された。所謂元和本である[17]。そして、寛永一五年（一六三八）には、京都の風月宗智がこの元和本を底本にして整版による覆刻を行った。所謂寛永本である。寛永本は句點・返り點・縱線・送り假名の訓點が施されており、日本に於ける『孔子家語』の普及に大いに役立った。太宰純（號は春臺、一六八〇～一七四七）の父言辰（號は空谷、一六三六～一七二三）は、加賀に生まれ、信州に住んだ武士であるが、『孔子家語』を好み、座右の書としたという[18]。それは白文の元和本より容易に讀むことのできる寛永本だったと思われる。

元和本・寛永本の登場により、王廣謀句解本は劣勢となり、王肅本が徳川時代を通じて『孔子家語』の底本となった。毛晉汲古閣本に比較しても遜色ない善本である元和本・寛永本を得、またその間、汲古閣本や何孟春注を始めとする明・清の版本・注釋が續々と輸入され、徳川時代中・後期には『孔子家語』研究が盛んになった。

徳川時代中期の元祿三年（一六九〇）、幕府は林羅山（一五八三～一六五七）の始めた林家の私塾を官學に改め、昌平坂學問所を設立した。ここには元和本や、明代の金蟠等校本・楊守勤『鼎刻楊先生註釋孔聖家語』・周宗建『新刻註釋孔子家語衡』・張鼐『新鍥侗初張先生註釋孔子家語雋』・陳際泰『新刻註釋孔子家語憲』・顧錫疇『鼎鋟二翰林校正句解評釋孔子家語正印』・吳嘉謨『孔聖家語圖』及び清初の姜兆錫『家語正義』等が所藏され、また大學頭の林家に毛晉校本・鄒德溥『新鍥台閣清謌補註孔子家語』・吳嘉謨『孔聖家語圖』が、江戸城内の紅葉山文庫にも錢受益本がそれぞれ所藏された[19]。主要な版本が揃い稀覯本も多く、開祖家康以來徳川幕府が一貫して『孔子家語』を重視し

たことが窺われる。

當時民間では、古學派の伊藤仁齋（一六二七～一七〇五）や荻生徂徠（一六六六～一七二八）等が支持されたが、彼らは『孔子家語』を蔑視したと言われる。[20] しかしながら、それは彼らが『論語』を絶對視し、次に『孟子』を尊重して、それ以外の典籍は概して輕視したからであり、『孔子家語』だけをそうしたのではない。仁齋・徂徠共に著述の中で『孔子家語』を典據に用いており、徂徠が『論語』憲問篇の「問管仲。曰、人也。」の「人」字を「仁」字に改めるべしとした仁齋の校勘[21]を批判して、「仁齋據『家語』改作『仁』也。皆不識文法。（仁齋は『家語』に依據し「仁」の字に改作したのである。皆文法を識らない。）[22]」と言う場面さえあるのだから、彼らがことさら『孔子家語』を蔑視していたのではないことが分かる。

ただし徂徠は「如『家語』乃剽『中庸』者已。何足爲據乎。（『家語』なんぞは『中庸』を剽竊した書物に過ぎない。どうして典據とする十分な資格があろうか。）[23]」と述べており、王肅僞作説を彷彿させるが、また、「『家語』曾子見大人常浩浩、『孟子』浩然之氣出此。（『家語』に、曾子は大人を見ることが常に浩浩（ひろびろ）としている、とあり、『孟子』の浩然の氣は此を出典とする。）[24]」とも述べるので、王肅僞作説ではなく、『論語』・『中庸』・『孔子家語』・『孟子』の順に成立したという彼獨自の説に基づくのであろう。徂徠は中國の學問に強い憧憬の念を持ち、常に最新の研究動向に關心を拂ったが、一七二八年に死んでおり、『孔子家語』王肅僞作説が盛んになる乾隆嘉慶の時代にまでは到らないから、その影響を受けた可能性はない。

寛保二年（一七四二）に、寛永本の校訂重刻版が出された。その間の經緯を出版元の風月堂は、「原刻王註『家語』、本係活版飜刻、仍襲厥誤、錯倒衍脱、有不可乙者。余有志于改刻久矣。（原刻王註『家語』は、本と活版の飜刻に係り、仍りて厥の誤を襲ひ、錯倒衍脱して、乙すべからざる者有り。余改刻に志有ること久しきなり。）[25]」、「『補註家語』成、已怖海内、舊板廼屬芻狗。夫涇以渭濁、不胥入奚徵湜湜。於是句去須丁斷尾、巖然始爲華本。再據諸家洮汰殽訛、微獨徵古湜湜、王氏之舊亦復厥眞云。（『補註家語』成り、已に海内を怖れしめ、舊板は廼ち芻狗に屬せり。夫れ涇は渭を以て濁り、胥ひ入らざるは奚ぞ湜湜に徵せん。是に於て句は須を去りて丁は尾を斷じ、巖然として始めて華本と爲る。再び諸家に據り殽訛を洮汰すれば、獨り古に徵して湜湜たるのみ微く、王氏の舊も亦厥の眞に復せりと云ふ。）[26]」と記す。かねてから寛永本の改刻を志していた風月堂であったが、それを實現できたのは、享保二〇年（一七三五）春に岡白駒（一六九二～一七六七）の『補註孔子家語』の原稿を得たからだと言う。岡白駒は明本の吳嘉謨注本・錢受益校本・何孟春本・汲古閣本によって校勘した定本を完成していたのである。[27]

寛保本では寛永本に詳細に施されていた訓點が句點を除いて消され、上欄に校語注が加えられた。寛永から寛保までの約百年の間に、日本人の漢文讀解能力は長足の進歩を遂げており、もはや訓點を必要としない、もしくは必要とすることを恥じるようになっていたのだ。

岡白駒の『補註孔子家語』は寛保元年（一七四一）に發行された。また翌年すなわち寛保本出版と同じ寛保二年には太宰純の『增注孔子家語』が江戸の書肆崇山房より上梓された。この二書は日本人による最初の本格的な注釋書でありながら、しかも德川時代を通じて最高の水準を誇ることになる。他に出版された注釋書としては、寛政元年（一七八九）刊の千葉玄之（一七二七～一七九二）『標箋孔子家語』、寛政四年（一七九二）刊の冢田虎（一七四五～一八三二）『註孔子家語』、寛

政六年（一七九四）刊の高田彪『孔子家語合注諺解』等があるが、千葉本は太宰本の増訂版であり、高田本は太宰・千葉・冢田各注の合注本である。[28] 興味深いのは冢田虎『註孔子家語』であるが、これについての考察は岡本・太宰本と共に次節に譲る。

徳川時代中期に刊行された『孔子家語』注釋書はいずれも本文には元和本・寛永本の系統を使っており、王肅本への批判はなく、王肅注も隨時參照する。當時の日本の儒學者は概して『孔子家語』に好意的であり、

（太宰）純按、……先儒多疑以爲王肅之徒所僞增。余惟不然。『家語』古書、其所載雖不及『論語』之粹、然其與『論語』、足以相徵者固多。王肅得而注之、亦信而好古者也。何敢誣之以僞增正文乎。[29]

（龜井）魯以爲此論極正。超茂卿而上矣。[30]

（純按ずるに、……先儒は多く疑ひて以て王肅の徒の僞增する所と爲す。余惟ふに然らず。『家語』は古書にして、其の載する所『論語』の粹に及ばずと雖も、然れども其の『論語』と、以て相ひ徵するに足る者固より多し。王肅得て之に注するも、亦た信じて古を好む者なればなり。何ぞ敢て之を誣ひて以て正文を僞增せんや。

魯以爲らく此の論は極めて正しきなり。茂卿を超えて上る。）

という太宰純の所說及びそれを大いに肯定する龜井魯（號は南冥、一七四三～一八一四）の考え方が一般的な評價であろう。

徳川時代後期に入ると、考據學の流行が淸から日本に傳播し、『孔子家語』に對する淸儒の嚴しい評價に影響される儒學者も出現した。幕末の大儒安井衡（號は息軒、一七九九～一八七六）は考證學に卓越した業績を殘したが、その主著『論語集說』の中でしばしば王肅僞作說に言及する。例えば、先進篇顏淵死章に於いて『孔子家語』を信用して考證に用いる毛奇齡（一六二三～一七一六）と王肅僞作說を固く信じその害惡を論じる翟灝との所說を採り上げ、[31]「毛・翟二家之說盡之矣。但毛不知『家語』爲王肅僞造、其言猶有可議者焉。當翟說爲正。（毛・翟二家の說之を盡せり。但だ毛は『家語』は王肅の僞造爲るを知らず、其の言猶ほ議すべき者有り。當に翟說を正と爲すべし。）[32]」と述べる。淸朝初期を代表する考證學者である毛奇齡をも王肅僞作說に無知だとして批判するのだ。その所論には乾嘉の學の影響が色濃く窺える。[33]

二　徳川時代に於ける『孔子家語』の注釋

（1）岡白駒『補註孔子家語』

岡白駒撰『補註孔子家語』は寛保元年（一七四一）、京都の書肆風月堂から出版された。魏の王肅序・篇目・岡自序を篇首に置き、十卷四十四篇、本文と王肅注との全て及び岡の補註を收め、全篇訓點（句點・返り點・送り假名・縱線）を施した日本初の全注本である。

岡白駒、字は千里、小字は太仲、號は龍州。播磨の人、播磨から攝津に移り、醫術を治めるも、京に移り、儒學に轉じる。晩年は肥前鍋島蓮池藩に仕え、文敎方面に從事した。岡白駒は經學を專門としていたが、文章が上手く、また小說俗語に通曉し、當世に名聲を博した。著書に『書經二典解』・『詩經毛傳補義』・『孟子解』等の儒學の注釋書、また『水滸傳譯解』・『小說精言』等の白話小說の注釋・翻譯がある。但し、經學方面の著作は、「既而恐後人以文士觀己、則傳註『詩』・『書』・『語』・『孟』、以崇其名。然已急於名、又好勝人。故其所論說、引證不精、且以臆見、勇斷疑義、或剿襲他人說、以爲其著作。雖取快於一時、難免識者指摘。（既にして後人文士を以て己を觀るを恐るれば、則ち『詩』・『書』・『語』・『孟』に傳註して、以て其の名を崇く

す。然れども已に名に急に、又人に勝ることを好む。故に其の論說する所、引證精からず、且つ臆見を以て、疑義を勇斷し、或は他人の說を剿襲し、以て其の著作と爲す。快を一時に取ると雖も、識者の指摘を免れ難し。）」[34]と評され、『補註孔子家語』についても、その執筆動機が太宰純の『增注孔子家語』への對抗意識にあったと傳えられる[35]。

岡白駒は明代の諸版本や注釋を參考にし、中でも明の何孟春『孔子家語註』を「註頗有所見。雖出于摸索、視之吳氏、誠爲巨擘焉。（註頗る見る所有り。摸索に出づと雖も、之を吳氏に視ぶれば、誠に巨擘と爲せり。）」[36]と高く評價する。その最終七篇の獨特な篇次（後述）も「是若序次得所。然不敢妄改、今且從舊本篇次。（是れ序次所を得たるが若し。然れども敢て妄りに改めず、今且らく舊本の篇次に從はん。）」[37]と道理のあることは認める。そして自序では何孟春序を巧みに換骨奪胎し、些か牽强附會氣味に自說に展開して、寬永本の優秀さを誇示する。すなわち、何孟春が唐代の今本を王肅本と推測したのを「卽此本（寬永本―引用者注）近矣」と展開し、何孟春が明の今本（王廣謀本）は王肅本の全書ではないと論じるのを寬永本のこととして述べる。また「仍肅原註補其不備、据諸家本汰於彼殽訛、庶不汶汶、六經之外、幸存此書、在善學者、則實古學餼羊也。（肅の原註に仍りて其の不備を補ひ、諸家の本に据りて彼の殽訛を汰せば、汶汶たらざるに庶し、六經の外、幸に此の書を存せば、善く學ぶ者に在りては、則ち實に古學の餼羊なり。）」[38]という結びの一文も何序の「六經外、『孝經』・『論語』後、幸存此書、奈之何使其汶汶而可也。（六經の外、『孝經』・『論語』の後、幸に此の書を存せば、之を奈何ぞ其をして汶汶ならしめて可ならんや。）」、「學者就其所見而求其論於至當之地、斯善學者之益也。（學ぶ者其の見る所に就きて其の論を至當の地に求めば、斯れ善く學ぶ者の益なり。）」[39]という二文からその語彙と論理とを踏まえて作製されている。本文の注釋でも何注を引用した例は枚擧の暇がない。ただし、それらの引用は大半が何注であることを明示しておらず、岡の注と區別できない。

「識者指摘」を竝べればきりがない岡白駒の『補註孔子家語』であるが、德川時代を通じてよく讀まれ、一七八四年以降、少なくとも五度にわたる重刷が行われ、發行所も京・大坂から、江戸にまで及ぶ[40]。岡白駒と親交が深かった出版元の風月堂主人澤文拱こと澤田一齋が、「攷覈諸本、引證古書、博采精研、鮮釋分明。千古疑案、爲之一新。（諸本を攷覈し、古書を引證すること、博采精研にして、鮮釋分明たり。千古の疑案も、之が爲に一新せり。）」[41]と絶贊するほどの出來映えではなく、「不精」・「臆見」・「剿襲」といった先の評語通りの惡癖が認められるにもかかわらず、『補註孔子家語』が根强い人氣を誇ったのは、それが全篇にわたって校勘・注釋を行った日本人による初めての通釋本であり、本文注釋共に岡白駒による返り點・送り假名が施され、さらに中國直輸入の何孟春注が適度に織り込まれた新式の讀本的古典だったからである。

實際、『補註孔子家語』をその訓點に從って讀み下してみれば、寬永本に比べて、口調が良く甚だ小氣味よい。送り假名は煩多でなく、注釋は簡略だったり詳細だったりするが、いずれも必要十分な分量だけ附いており、知的水準の向上した當時の日本人の需要に最適だったに違いない。

（2）太宰純『增注孔子家語』

太宰純撰『增注孔子家語』は寬保二年（一七四二）、江戸の書肆崇山房から出版された。太宰自序・王肅序（附太宰注）・王肅略傳・篇目を卷首に備え、十卷四十四篇、本文と王肅注との全部及び太宰の增注を

收め、卷末に毛晉「汲古閣板『孔子家語』跋（含「何孟春序」）」・太宰自跋を附錄する。全篇句點・聲點のみ施され、返り點・送り假名は刻されない。

太宰純、字は德夫、小字は彌右衞門、號は春臺、別號は紫芝園。信濃の人、江戸に移り、はじめ性理學を學ぶも後、荻生徂徠門下に入り、經學を治め著名となった。現實社會の政治經濟にも關心が深く、『經濟錄』等を著した。經學方面の著書に『古文孝經國字解』・『論語古訓』・『論語古訓外傳』・『聖學問答』等がある。[42]

太宰純は荻生徂徠門下で學問の面での後繼者と目されたが、決して師を祖述するだけの弟子ではなく、徂徠からは「雞肋視」されたと言う。『孔子家語』についても、徂徠は『論語』・『孟子』より價値の下がる書物として輕視したのに對し、太宰がその重要性に目を向けるべきだと主張したことは前節で見た通りである。太宰はまた『論語古訓』の自序で次のように主張する。

夫刪『詩』敍『書』、記『禮』正『樂』、贊『易』修『春秋』、此仲尼之所以奉答天命也。至其平日所與門弟子言者、廼『六經』之奧義、聖人之祕旨也。門人更記而傳之。其一爲『孝經』、其二爲『論語』、其三爲『家語』。漢時其書皆出。……『家語』唯有王肅注。[43]

（夫れ『詩』を刪して『書』を敍し、『禮』を記して『樂』を正し、『易』を贊じて『春秋』を修むるは、此れ仲尼の天命を奉答する所以なり。其の平日門弟子と言ふ所の者に至りては、廼ち『六經』の奧義、聖人の祕旨なり。門人更めて記して之を傳ふ。其の一は『孝經』爲り、其の二は『論語』爲り、其の三は『家語』爲り。漢の時其の書皆な出づ。……『家語』は唯だ王肅注有るのみ。）

すなわち、太宰は『孔子家語』を「『六經』之奧義、聖人之祕旨」を孔子の直弟子が傳える書物として、『孝經』・『論語』と同等の價値を有すると認識するのだ。そして漢代にこれら三書は皆出現し、『孔子家語』には王肅の注だけが依據すべきものとして唯一存在すると述べる。

『增注孔子家語』は『論語古訓』と前後して執筆された。[44] その自序でも同一の認識を示し、次のように言う。

仲尼門人錄仲尼言語・行事及門人問對・論議之語、命之曰『家語』。琴張・原思等取『家語』中純粹正實者而修其文、以爲『論語』。是『論語』之與『家語』、猶『春秋』內外傳也。漢時『論語』獨行。[45]

（仲尼の門人仲尼の言語・行事及び門人問對・論議の語を錄して、之に命づけて『家語』と曰ふ。琴張・原思等『家語』中の純粹正實なる者を取りて其の文を修し、以て『論語』と爲す。是れ『論語』の『家語』とは、猶ほ『春秋』內外傳のごときなり。漢の時には『論語』獨り行はる。）

この論說はほぼ王肅序を踏襲する。太宰は王肅を信賴しており、

「子雍通儒、已得是書於孔猛而首尊信之、遂從而注之。後儒多有取焉。（子雍は通儒にして、已に是の書を孔猛に得て首尊して之を信じ、遂に從りて之に注せり。後儒多く焉に取る有り。）」[46] と述べる。太宰自序はこの後、『孔子家語』の辿った紆餘曲折を綴り、唐代まではその眞を疑う儒者はいなかったが、宋以降程朱學が盛行するにつれ、顧みられなくなったことを述べる。なお、程朱學の勃興を『孔子家語』衰亡の原因とするのは、岡序にも見える說[47]だが、正確とは言えず、中國には見られない日本獨自の說である。岡や太宰が日本儒學に於いて程朱學派と対立し勢力を二分した古學派に屬することから生じた門戸の偏見と言える。

太宰は『孔子家語』を愛讀した父の影響で幼時からこの書に親しん

できた。後年徂徠の薫陶を受け『論語』の獨尊を學び、『家語』・『論語』を孔門の兩輪とする理論に達する。すなわち

『家語』雖曰騁駁、實七十子所記、孔氏遺文也。『論語』雖曰雅訓、有得『家語』而後其義始明者焉。禮樂之壞崩也、得『家語』亦可以修補其十一矣。『家語』寧可廢乎。……若『家語』則門人各隨記其所聞、而未經修正者已。其實孔氏遺文無疑焉。尤不可廢也。純愚信仲尼、是以信『家語』如『論語』。[48]

（『家語』騁駁と曰ふと雖も、實に七十子の記す所にして、孔氏の遺文なり。『論語』雅訓と曰ふと雖も、『家語』を得て後其の義始めて明らかになる者有り。禮樂の壞崩するや、『家語』を得れば亦以て其の十に一を修補すべきなり。『家語』寧ぞ廢すべけんや。……『家語』の若きは則ち門人各おの其の聞く所を隨記して未だ修正を經ざる者なるのみ。其の實孔氏の遺文たること疑ひ無し。尤も廢すべからざるなり。純愚仲尼を信じ、是を以て『家語』を信じること『論語』の如し。）

という理論である。

このように『孔子家語』はきわめて重要な書物であるが、宋元明の間にその舊を失った。幸い日本には毛晉が復元した宋本に比肩する王肅注全本の善本を有し、刊本として普及するが、なお校勘が必要であり、難解な文意を理解するのに資する良質の注釋が必要だった。そこで太宰は自らが、その難事業を行うことにしたのである。自序に言う。

既而竊恨舊本（寛永本―引用者注）多誤、文義難曉。乃得海舶所貢王注全本及元明諸儒數家本以挍之、又旁搜傳記・諸子所載與是書事同文異者、若後世注家所引是書及王注文、以參考之、積以歳月、可以正誤通義者、不止十五。又子雍所略不注、而今之幼學所不能解、則取諸名家訓注在他書者、以補之、命曰『增注』。舊本有音釋而甚略、予今效陸德明用唐音。悉注其當注者、冀讀者無紕繆。[49]

（既にして竊かに恨むらくは舊本誤多く、文義曉り難し。乃ち海舶貢する所の王注全本及び元明諸儒數家の本を得て以て之を挍し、又旁ら傳記・諸子載する所と是の書と事同じくして文異なれる者を搜し、後世の注家引く所の是の書及び王注の文の若きは、以て之を參考にし、積むに歳月を以てせば、以て誤りを正し義を通ぜしむべき者、十に五あるに止まらず。又子雍略して注せざる所なるも今の幼學の解す能はざる所は、則ち諸名家の訓注の他書に在る者を取りて、以て之を補ひ、命づけて『增注』と曰ふ。舊本に音釋有るも甚だ略なれば、予今陸德明に效ひ唐音を用ふ。悉く其の當に注すべき者に注し、讀者紕繆無からんことを冀へり。）

太宰が、必要な箇所には全て注釋し、紕繆なからんと冀った讀者とは誰であろうか。四〇年餘り後の資料だが、千葉玄之「『標箋孔子家語』序」に解釋の一つが見える。すなわち、『孔子家語』を讀めば、聖人孔子に對面するようだと感歎した後、「王侯・貴人・大夫・庶士、朝習夕誦、采摘其最關綱紀者、則不啻終身之誡、百爾正德、利用厚生、了然確切、自得日用之實。於是人心悅、而天下服、彰厥有常。（王侯・貴人・大夫・庶士、朝に習ひ夕に誦し、其の最も綱紀に關かる者を采摘すれば、則ち啻だに終身の誡のみならず、百爾の正德、利用厚生、了然として確切、自から日用の實を得。是に於て人心悅んで天下服し、厥の常有るを彰らかにす。）」と記し、また最後に、「余謂此書也、王侯・貴人・大夫・庶士、手披心寄、朝夕嗜之、則勤邦儉家、不自滿假。親賢遠姦、不爽聖訓、且賤虛名、貴實用、不期然而然。讀者仰慕典章、幸毋忽視。（余謂らく此書や、王侯・貴人・大夫・庶士、手に披き心に寄せ、朝夕之を嗜みなば、則ち邦に勤めて家に儉し、自ら滿假せず。賢を親しみ姦を遠ざけ、

聖訓に爽はず、且つ虚名を賤にし、實用を貴ぶこと、然ることを期せずして然らん。讀む者典章を仰慕し、幸はくは忽がせに視ること毋かれ。)」[50]と記す。

「王侯・貴人・大夫・庶士」、つまり日本風に言えば、上は徳川將軍から、諸大名・上級武士を挾んで、下は下級武士に至るまでの武士階級こそが『孔子家語』の讀者として想定されるのだ。武士は皆すべからく『孔子家語』を熱心に讀み、修身齊家に務めなくてはならない、と言うのである。

千葉は學者であるから、『孔子家語』を下級武士まで含めた武士階級一般の修養のための書と位置づけたが、千葉の門弟で譜代の幕臣である日光防火使隊長鹽野光迪（一七四七～一八〇六）は、「冀王侯・卿・大夫繙閲此書、仰慕聖言、爲政以德、偃武修文、身端心誠、以敎富庶、則使天下國家有益於治道。（冀はくは王侯・卿・大夫此書を繙閲し、聖言を仰慕し、政を爲すに德を以てし、武を偃せ文を修し、身端だしく心誠に、以て富庶に敎へば、則ち天下國家をして治道に益有らしむ。）」[51]と論じる。對象讀者はより限定されて、大夫卽ち上級武士までとされた。爲政に關わる資格と責任とを有するこの階層こそが、『孔子家語』を披閲して孔子の言葉を信奉し、德治・文治の要諦を學んで國力を充實させ、國家を安泰に導かねばならない、と言うのだ。『孔子家語』は天下國家を擔う爲政者のための、治道に有益な書物だとする鹽野の考え方は、德川家康の意向により『孔子家語』を開版した三要元佶が『孔子家語』を「聖人奥義、治世要文」とした言葉と遙かに呼應する。

太宰はその主著『經濟錄』の序に、「孔子ノ道者、先王ノ道也。先王ノ道ハ、天下ヲ治ル道也。……四方萬國、日月ノ照ス程ノ地ニ、聖人ノ道ノ行ハレザル處有ベカラズ。況ヤ日本ハ往古ヨリ聖人ノ道ヲ用ヒテ治メ來レル國ナレバ、末世トテモ再興セラレマジキニ非ズ。若英雄豪傑ノ人有テ、上ニ用ヒラレ、時ヲ得テ其術ヲ施サバ、先王ノ道、孔子ノ敎、海内ニ行ハレテ、萬民其澤ヲ被ランコト、日ヲ計テ待ベシ。」[52]と記す。英雄豪傑とは武勇傳の主人公を指すのではない。孔子の道を實踐する勇氣の持ち主の謂いなのだ。そして太宰は『孔子家語』こそは「『六經』之奥義、聖人之祕旨」すなわち孔子の道を傳える書物の一つに他ならないと信じる。太宰の『孔子家語』に對する評價は鹽野のそれと一致する。そうだとすれば、太宰の想定する讀者とは、爲政者としての氣概を有する武士の他にはいない。

（3）冢田虎『註孔子家語』

冢田虎撰『註孔子家語』は寛政四年（一七九二）、江戸の書肆崇山房から出版された。冢田自序を卷首に置き、十卷四十四篇、本文の全てと冢田の注とを收め、卷末に孔安國・孔衍の所謂「後序」を附する。全篇訓點（句點・返り點・送り假名・縱線・聲點）が施される。

冢田虎、字は叔貔、號は大峯。信濃の人、後江戸に移り、獨學で儒學を治め、弱冠二五歳にして門戸を張り敎授した。はじめ室鳩巢の門人であった父旭嶺の影響で朱子學を學ぶが、三十歳代の時に古注を重んじるようになり、寛政異學の禁に反對して、老中松平定信を批判した。晩年尾張德川家に出仕し、藩校の明倫堂督學となった。著書に『家註周易』・『家註論語』・『家註孔叢子』・『聖道得門』等がある。[53]

冢田が『註孔子家語』を出版した時代には、すでに岡註・太宰注が出版されて五十年が過ぎており、千葉の標箋もその三年前に刊行された。それにも拘わらず、冢田が著作を志したのは、次のような經緯からであった。

我黨子弟、依二氏（岡・太宰―引用者注）之所增補讀之、猶頗有

不曉文義者也。虎也、少而讀『家語』猶讀『論語』。今而誘子弟、亦傳『家語』、猶傳『論語』。然爲其頗有不曉文義者、乃以累年務而比諸本異同、兼方傳記及諸子百家所記載、參之以校文、伍之以合義、從其多且穩者、謹以修經文訛舛、更私作訓解、以立之於家塾、唯欲使我黨子弟益信之猶『論語』、而永不失二『語』之耦也已矣。[34]

（我が黨の子弟、二氏の增補する所に依りて之を讀むに、猶ほ頗る文義を曉らざる者有るなり。虎や、少くして『家語』を讀むこと猶ほ『論語』を讀むがごとし。今にして子弟を誘ふに、亦『家語』を傳ふること、猶ほ『論語』を傳ふるがごとし。然れども其の頗る文義を曉らざる者有るが爲に、乃ち累年の務を以てして諸本の異同を比べ、兼て傳記及び諸子百家の記載する所を方べ、之を參じて以て文を校べ、之を伍して以て義を合せ、其の多にして且つ穩なる者に從ひて、謹んで以て經文の訛舛を修め、更に私かに訓解を作り、以て之を家塾に立て、唯だ我が黨の子弟をして益ます之を信ずること猶ほ『論語』のごとくして、永く二『語』の耦を失なはざらしめんと欲するのみ。）

冢田は若い時から『孔子家語』を『論語』と同じ位愛讀し、今日家塾の弟子たちを誘掖して『論語』と同じ位の熱心さで『孔子家語』を傳授した。弟子たちは岡補註や太宰增注を參照して『孔子家語』を讀んだが、なお文意を理解できない箇所が多いため、冢田は年月を掛けて校勘を行って穩當な本文の定本を作製し、更に個人的な注釋ノートを著作して、家塾に立て弟子たちに示したと言うのだ。

確かに、『註孔子家語』を見れば、家塾での授業に使用するための教科書という體裁である。音注が多くて聲點があり、間違いやすい活用や助詞の送り假名は全部明記されており、初學者には相當親切である。反面、篇目がなく、王肅注をはじめ、先行の注釋を明示せず取り込んだり、典據を示すことが少ない等、學術的は物足りない印象を受ける。

また、冢田は序の中で『論語』・『家語』對耦說を唱え、『論語』との對比で『孔子家語』の苦難の歷史を敍述するが、『論語』・『家語』對耦說は太宰に先蹤があり、歷史敍述は岡序や太宰序の敷衍である。ただし、『群書治要』が『孔子家語』を經部の書物として『孝經』・『論語』の次に收錄するのは唐代には『孔子家語』を『論語』の對耦として尊崇していた證據であると指摘し、また日本には中國では散佚した經籍が多く存續し、傳來の博士家藏本はその一つだと誇る一方、それは唐代の王肅注全本そのままではないと正確に考證しており、冢田の見識の高さが窺える。

冢田の『註孔子家語』の最大の特徵はその篇次にある。冢註本は最終七篇の篇次を卷之九「正論解第三十八」・「曲禮子貢問第三十九」・「曲禮子夏問第四十」・「曲禮公西赤問第四十一」、卷之十「本姓解第四十二」・「終記第四十三」・「七十二弟子解第四十四」とする。このような篇次は明の何孟春本が創始し、明・萬曆一七年（一五八九）刊の吳嘉謨『孔聖家語圖』、明末の金蟠・葛鼐校永懷堂刊本『孔子家語』及び淸・雍正一一年（一七三三）刊の姜兆錫『家語正義』が採用する。

吳嘉謨本・金蟠等校本・姜兆錫本が昌平坂學問所に藏されたことは前節で見た。吳嘉謨本と何孟春本とは岡序でその優劣が論じられ、太宰序も何孟春に言及する。また姜兆錫本は文政年間（一八一八～一八三〇）以降各地の儒學者に盛んに利用され、姜注も議論の對象とされており、その盛行ぶりが窺える。[35] 何孟春本以下四書とも德川時代中・後期に日本に流通し、冢田が目を通した可能性はあるから、何孟

春本に直接影響されたと考えるのが自然であろうが、いずれの書に影響されたかは未詳である。

冢田が何孟春本系統の篇次に従ったのは何故であろうか。先に私は、何孟春は王廣謀本の篇次を王廣謀の改竄の結果であると考え、王肅本の舊に戻す目的で篇次を改めたが、その際『孔子聖蹟圖』の影響を受け、物語としての完成度を高める意圖があった、と推論した。[56]すなわち、『孔子聖蹟圖』は孔子の生涯を時間軸に沿って圖解した一代記であり、孔子誕生傳説に始まり臨終及び弟子の服喪・漢帝の祭祀という死後の出來事で締めくくられる。一方、『孔子家語』は、王廣謀本の篇次では――實は宋本系統の王肅本も同じ篇次であるが――最後の七篇は構成に脈絡がなく、卷を閉じるにあたり些か感興を削がれる印象を否めない。ところが何孟春本では、最後に孔子の生涯をもう一度簡潔に回顧する篇、弟子たちに看取られながら迎えた臨終の場面と弟子たちの服喪の様子とを記した篇が順に配列され、さらに最終篇として弟子達を改めて紹介するエピローグが置かれて、物語として極めて効果的な構成となっている。また、明の吳嘉謨は『孔子家語』と『孔子聖蹟圖』とを合體し『孔聖家語圖』を作製したが、その際何孟春本の編次に依ったと述べる。[57]何孟春本と『孔子聖蹟圖』との構成の近似性は誰の目にも明らかなのだ。何孟春の改變の背後に『孔子聖蹟圖』の影を見て取ることは容易である。

『孔子聖蹟圖』は明清時代を通じ流行し様様な版本が作られ、中國各地ばかりでなく、日本にも傳播した。慶長一三年（一六〇八）には早くも、張楷本の翻刻が刊行され、萬治二年（一六五九）には林羅山解説の『聖蹟圖説諺解』が、元祿四年（一六九一）には『新刊聖蹟圖』が、寛政元年（一七八九）には、『孔子行狀圖』が、文化二年（一八〇五）には『孔子事跡圖解』が、天保九年（一八三八）には山東京傳『大聖傳』がそれぞれ出版された。[58]

岡白駒は何孟春本の篇次を順當だと感じたが、その理由は彼の文學者的資質による直感もあろうが、或いは『孔子聖蹟圖』に親しんだ經驗が影響したのかも知れない。冢田虎も『孔子聖蹟圖』に觸れる機會は少なくなかったはずであり、冢註本が家塾の子弟教育の教科書として製作されたことを考慮に入れれば、『孔子聖蹟圖』に準據した何孟春本の篇次に從った方が、より教育的効果が期待できると考えたとしてもおかしくはない。あるいは勘ぐれば、『孔子行狀圖』以下三書の出版元は冢田註本や太宰增注本と同じ崇山房であったから、商業的効果も期待されたかも知れない。

結語

佐藤坦（號は一齋、一七七二～一八五九）の『初學課業次第』は、官立と私立とを問わず當時の漢學校で行われていた一般的な教育課程を記した手册であるが、その「會讀」の項で、「右ノ書ニテ大抵文義ニ通スルヤウニ成ルヘシ」として列擧する一〇部の書物の中に『孔子家語』がある。[59]德川時代には開祖家康が『孔子家語』を重要視したこともあって、江戸の昌平坂學問所を據點に全國津津浦浦の藩校・私塾に至るまでの漢學教育機關で『孔子家語』を教育・研究する共通カリキュラムが整備されていたのである。

そこでの教科書には最初は家康の頒布した伏見本（王廣謀句解本）が、次いで元和本・寛永本（王肅本）が使われたであろうが、後には岡補註本や太宰增注本が使われることもあったのは、冢田虎の私塾での例から知られる。それら注釋本は、博士家傳來の宋本系王肅本と

いう優良なるテキストを底本にして當代一流の學者が全篇にわたって校勘・注釋し、さらに太宰注を除くそれらには詳細な訓點が附刻されており、多少の素養のあるのものならば、難解な漢籍を日本の古典として容易く讀むことを可能にした。

そしてその結果、德川時代には『孔子家語』は『論語』と竝んで、或いはそれを凌駕して人口に膾炙していたのである。例えば、上田秋成（一七三四～一八〇九）はその隨筆の中で、「聖人」とあだ名される人物の半可通を揶揄して、「『家語』の孔子と『左傳』の孔子と『論語』のと、人がちがふやうなり」[60]と記す。漢學の素養のある文人の文章に『孔子家語』を典據とするエピソードが登場する例は他にもある。

このように德川時代の日本に於いて『孔子家語』は正規の教育課程の中に組み込まれ、また巷間誰もが知る身近な書物だったのであり、身分の違いによってその仕方を異にしながらも、孔子の眞理の言葉を傳える書物として、あまねく享受されていたのである。

注

（1）〔淸〕紀昀等『四庫全書總目』卷九一『孔子家語』提要、『四庫全書』文淵閣本（『景印文淵閣四庫全書』、臺北、臺灣商務印書館、一九八六年）、第四丁裏～五丁表。

（2）狩野直喜『魏晉學術考』（東京、みすず書房、一九六八年）、第二七～二八頁、服部宇之吉『漢文大系』二〇『孔子家語』解題（東京、冨山房、一九一五年）、第三～四頁、武內義雄「讀家語雜識」（『武內義雄全集』四、東京、角川書店、一九七九年）、第三五〇頁、藤原正『孔子家語』緒言（東京、岩波書店、一九三三年）、第六頁を參照。なお、前近代中國に於ける『孔子家語』受容史については、南澤良彥「『孔子家語』の流傳と評價との再檢討」（九州中國學會『九州中國學會報』五一、二〇一三年）を參照。

（3）『孔子家語』關係の出土資料研究については、李學勤『簡帛佚籍與學術史』「竹簡『家語』與漢魏孔氏家學」・「八角廊漢簡儒書小議」（臺北、時報文化出版、一九九四年）、楊朝明『孔子家語通解』「前言：出土文獻與『孔子家語』僞書案的終結」（臺北、萬卷樓圖書、二〇〇五年）等を參照。

（4）山城喜憲「知見孔子家語諸本提要（一）・（二）・（三）」（慶應義塾大學『斯道文庫論集』二一・二二・二四、一九八五・八八・九〇年）は日本所在の中國及び日本の『孔子家語』版本を網羅的に調査した書誌學研究であり、記述內容は思想史的研究にも極めて有益である。

（5）藤原佐世『日本國見在書目錄』、『日本書目大成』第一卷（東京、汲古書院、一九七九年）、第一〇頁。

（6）藤原佐世『日本國見在書目錄』、第二五頁。

（7）尾崎康「群書治要とその現存本」（『斯道文庫論集』二五、一九九一年）、第一二七～一二八頁を參照。

（8）山城喜憲「知見孔子家語諸本提要（一）」、第一九一頁を參照。

（9）同注（8）。阿部隆一「金澤文庫所藏鎌倉鈔本『孝經正宗分聞書考』」（神奈川縣立金澤文庫『金澤文庫研究』通卷九五號、一九六三年）、第六頁を參照。

（10）同注（8）。足利學校遺蹟圖書館『足利學校珍書目錄』（栃木縣足利町、足利學校遺蹟圖書館、一九一一年）、第三五頁を參照。

（11）古活字版については、川瀨一馬『古活字版之研究』增補版（東京、日本古書籍商協會、一九六七年）を參照。

（12）三要元佶『標題句解孔子家語』跋」、〔元〕王廣謀『標題句解孔子家

語』（京都、慈眼活字印、一五九九年）、巻下、第二七丁。

(13) 川瀬一馬『古活字版之研究』増補版を参照。

(14) 西笑承兌「『貞觀政要』跋」、〔唐〕吳兢『貞觀政要』（京都、慈眼活字印、一六〇〇年）、巻末。

(15) 三要元佶「『七書』跋」、〔宋〕闕名『七書』（出版者不明、一六〇六年）、巻末。

(16) 太宰純「『増注孔子家語』序」、太宰純『増注孔子家語』（江戸、嵩山房、一七四二年）、巻首、第二丁裏。

(17) 元和本については、山城喜憲「知見孔子家語諸本提要（一）」、第一九一〜一九二頁及び第二一八〜二二二頁を参照。山城氏は、元和本の底本を宋刻本と推定する。

(18) 太宰純「『増注孔子家語』序」、第三丁表、「先君子空谷府君、性好載籍。悅『家語』、常置之座右。（書き下し文省略）」

(19) 現在は全て國立公文書館内閣文庫の所藏である。

(20) 亀井魯『論語語由』巻一八微子篇、『亀井南冥昭陽全集』第一巻（福岡、葦書房、一九七八年）、第一八五頁、「按『史記』文截略『家語』、明白無疑。維禎（伊藤仁齋）・茂卿（荻生徂徠）、獨信『孟子』、蔑如『家語』何居。（按ずるに『史記』の文は『家語』を截略せしこと、明白にして疑ひ無し。維禎・茂卿は、獨り『孟子』を信じ、『家語』を蔑如するは何にか居る。）」書き下し文は原書の訓點に從う。

(21) 伊藤仁齋『論語古義』（京都、文會堂・奎文堂、一七一二年序）、巻七憲問篇、第二二丁裏、「人當作仁。按『家語』（致思篇）載「子路問管仲之爲人如何、子曰、仁也」、則人字本仁字之誤明矣。（人當に仁に作るべし。按ずるに『家語』に載す、子路管仲の人となり如何と問ふ、子曰く、仁なりと、則ち人の字本と仁の字の誤なること明けし。）」書き下し文は原書の訓點に從う。

(22) 荻生徂徠「譏園八筆」、『譏園十筆』、『荻生徂徠全集』第一七巻（東京、みすず書房、一九七六年）、第五〇七頁。なお、訓讀を否定した徂徠の考えを尊重して、徂徠の文は書き下し文ではなく、現代語譯を添える。

(23) 荻生徂徠「譏園七筆」、『譏園十筆』、第四八六頁。

(24) 荻生徂徠「譏園八筆」、『譏園十筆』、第五一三頁。『孔子家語』巻三弟子行篇、『四庫全書』文淵閣本、第六丁裏には、「滿而不盈、實而如虛、過之如不及、先王難之、博無不學、其貌恭、其德敦、其言於人也、無所不信、其驕大人也、常以浩浩〈（王肅注）、浩然志大。驕太貌也。大人富貴者也〉、是以眉壽、是曾參之行也。（書き下し文省略）」とある。

(25) 風月堂主人澤文洪「『補註孔子家語』刊語」、岡白駒『補註孔子家語』（京都、風月堂、一七四一年）、封裏。

(26) 風月堂「『孔子家語』木記」、『古本孔子家語』（京都、風月堂、一七四二年）、目錄末。

(27) 岡白駒の『孔子家語』校定については、山城喜憲「知見孔子家語諸本提要（二）」、第六〜一一頁を参照。

(28) 千葉玄之『標箋孔子家語』と高田彪『孔子家語合注諺解』とについては、それぞれ山城喜憲「知見孔子家語諸本提要（二）」、第三二〜四七頁及び第六九〜七一頁を参照。

(29) 太宰純『論語古訓外傳』（江戸、崇山房、一七四五年）、巻六雍也篇、第一一丁表・裏。

(30) 亀井魯『論語語由』巻六雍也篇、第六四〜六五頁。亀井は、「太宰純曰」として、右の『論語古訓外傳』の文章を引用し、このように述懐する。なお、太宰の原文「然其與『論語』、足以相徵者固多。王肅得而注之」を、亀井の引用は「然與『論語』其義相發者固多。王肅註而傳之」に作る。

(31) 安井衡所引の毛奇齡の文章は其の『論語稽求篇』卷五に、翟灝の文章は其の『四書考異』にそれぞれ見える。
(32) 安井衡『論語集說』（京都、勝村治右衞門他、一八七二年）、卷四、第七丁裏。書き下し文は原書の訓點に從う。
(33) 安井衡の『孔子家語』評價は、金培懿「安井息軒の經典注釋法について―『論語集說』を中心に」（九州大學中國哲學研究會『中國哲學論集』二五、一九九九年）を參照。
(34) 原善『先哲叢談』（京都、朝倉八右衞門刻、一八一六年）、卷七岡白駒傳、第一五丁裏～一六丁表。書き下し文は原書の訓點に從う。
(35) 岡百駒の事績は、原善『先哲叢談』卷七岡白駒傳、山城喜憲「知見孔子家語諸本提要（二）」、第二～一三頁を參照。
(36) 岡白駒『補註孔子家語』序」、『補註孔子家語』篇目、第四丁裏。
(37) 岡白駒『補註孔子家語』卷九・七十二弟子解篇、題目注。
(38) 以上すべて岡白駒「『補註孔子家語』序」、第四丁表・裏に見える。
(39) 〔明〕何孟春『孔子家語』序」、何孟春註『孔子家語』卷首、『四庫全書存目叢書』子部一（臺南、莊嚴文化事業有限公司、中國歷史博物館藏明正德十六年刻本影印本、一九九五年）、第三頁。
(40) 山城喜憲「知見孔子家語諸本提要（二）」、第五～六頁を參照。
(41) 風月堂主人澤文拱識語、『補註孔子家語』表題、題字左。
(42) 太宰純の事績は、原善『先哲叢談』卷六太宰純傳を參照。
(43) 太宰純『論語古訓』序」、『論語古訓』（江戸、崇山房、一七九二年再版〈初版一七三九年〉）、卷首、第一丁表・裏。
(44) 山城喜憲「知見孔子家語諸本提要（二）」、第二九～三二頁を參照。
(45) 太宰純『增注孔子家語』序」、第一丁表・裏。
(46) 太宰純「『增注孔子家語』序」、第一丁裏～二丁表。
(47) 岡白駒『補註孔子家語』序」、第四丁裏、「自宋儒四子、獨尊『論語』、『論語』行而『家語』廢。廢則泯沒、勢之所必然也。（宋儒四子、獨尊『論語』を尊ぶ自り、『論語』行はれて『家語』廢る。廢るれば則ち泯沒するは、勢の必ず然らしむ所なり。）」
(48) 太宰純『增注孔子家語』序」、第三丁裏～四丁表。
(49) 太宰純『增注孔子家語』序」、第三丁表・裏。
(50) 以上、千葉玄之『標箋孔子家語』序」、『標箋孔子家語』（江戸、崇山房、一七八九年）、卷首、第一丁表～二丁裏。書き下し文は原書の訓點に從う。
(51) 鹽野光迪『標箋孔子家語』跋」、『標箋孔子家語』卷末、第二丁表・裏。書き下し文は原書の訓點に從う。
(52) 太宰純『經濟錄』序」、『經濟錄』卷首、『日本思想大系』三七『徂徠學派』（東京、岩波書店、一九七二年）、第八～九頁。
(53) 冢田虎の事績は、高瀨代次郎『冢田百峰』（東京、光風館書店、一九一九年）を參照。
(54) 冢田虎『註孔子家語』序」、冢田虎『註孔子家語』（江戸、崇山房、一七九二年）、卷首、第五丁表・裏。書き下し文は原書の訓點に從う。
(55) 山城喜憲「知見孔子家語諸本提要（二）」、第二五頁は、文政年間以後、姜注は日本の儒學者に少なからぬ影響を及ぼした、と指摘する。
(56) 南澤良彥『孔子家語』の流傳と評價との再檢討」、第八～一〇頁を參照。
(57) 〔明〕吳嘉謨「『家語圖』凡例」、吳嘉謨『孔聖家語圖』、『中國古代版畫叢刊二編』第三輯（上海、上海古籍出版社、一九九四年）、第一八頁、「篇章次序、今依何孟春氏編次」。吳嘉謨『孔聖家語圖』と『孔子聖蹟圖』との關係については、楊文歡「明・吳嘉謨『孔聖家語圖』と明代の出版」（九州大學中國文學會『中國文學論集』四〇、二〇一一年）を參照。

(58) 『孔子聖蹟圖』については、加地伸行『孔子畫傳　聖蹟圖に見る孔子流浪の生涯と教え』（東京、集英社、一九九一年）、竹村則行「近世の中國・朝鮮・日本に傳播した『孔子聖蹟圖』」、森川雅彦等編著『東アジア世界の交流と變容』（福岡、九州大學出版會、二〇一一年）を參照。

(59) 佐藤坦『初學課業次第』（出版者不明、一八五二年）、第二丁表。一〇部の書物は順に『小學』・『十八史略』・『孔子家語』・『大戴禮』・『說苑』・『新序』・『蒙求』・『春秋左氏傳』・『國語』・『史記』である。德川時代の漢學校教學課程については、古田東朔「江戸期漢學學習方法覺書―『初學課業次第』をめぐって」（全國大學國語教育學會『國語科教育』三、一九五六年）を參照。

(60) 上田秋成『膽大小心錄』、『日本古典文學大系』五六『上田秋成集』（東京、岩波書店、一九五九年）、第三六八頁。